

連体節表現における焦点について

金 春女

キーワード 焦点、連体節、被修飾名詞、名詞句、文の主要部

1. はじめに

連体節表現は、従来の研究¹⁾では、連体節と被修飾名詞のみを切り取って問題にされることが多かった。しかし、実際の発話では「連体節+被修飾名詞」といった名詞句（以下、「連体節+被修飾名詞」を名詞句と呼ぶ。）のみで使われることは少なく、次の(1)、(2)、(3)のように、文の一要素として使われるのが普通である。

- (1) 彼女は学校から15分で行ける自由が丘に住んでいる。(作例) (連体節を一重下線、被修飾名詞を二重下線で示す。以下同様)
- (2) アルバイトで稼いだお金で学費を払う。(作例)
- (3) 親は子どもが帰国する日を待っている。(作例)

「学校から15分で行ける自由が丘」、「アルバイトで稼いだお金」、「子どもが帰国する日」のような名詞句は、構造的には被修飾名詞が主要部であると言える。しかし、意味的には連体節と被修飾名詞の重要度が異なるように思われる。例えば、(1)の文は、連体節がなくても文として不自然ではない。この文においては、被修飾名詞の「自由が丘」、つまり「どこに住んでいるか」という地名が重要だからである。他方、(2)の文では「学費」は当然「お金」であるので、被修飾名詞である「お金」を「の」等の形式名詞に入れ換えても意味が通じる。したがって、「どのようにして得たお金であるか」を示す「アルバイトで稼いだ」という連体節のほうが被修飾名詞よりも重要である。(3)については、言うまでもなく、連体節と被修飾名詞の両方がなければ文意が通らない。このように連体節を文の中で考察すると、連体節・被修飾名詞の重要度に差が見られる。したがって、連体節を考察する際には、連体節と被修飾名詞との関係のみではなく、主節との関係、あるいは文脈との関係も考慮に入れる必要がある。²⁾

このような発想に基づいて、本稿では、焦点という観点から日本語の連体節を考察する。焦点に関しては、伝達・質問という観点からの定義がしばしばなされ、新情報・旧情報と関連づけた研究（柴谷他（1982）、吉本（1993）など）が多いが、本稿では連体節・被修飾名詞を主節・文脈と関連付け、「連体節を含む文においてその文の主要部にとってより重要な情報である部分」という意味で焦点という用語を用いることにする。「主要部」というのは連体節を含む文の主節であったり、その文全体が使われた文脈であったりする。焦点というのは談話レベルの観点であり、文レベルで論じることは違和感を感じさせるが、発話の全てが文脈の影響を受けるとは考えられない。発話によっては、文脈の影響を受けるものもあれば、そうでないものもあると考えられる。例えば、(4)の場合である。この文において「ベッドに慣れていなかった」を必要とするのは主節である「アメリカに来てから既に何度も転げ落ちていた」である。つまり、これは文脈の影響を受けるといよりは一つの文の中で連体節あるいは被修飾名詞の役割が決まると言えよう。

- (4) ベッドに慣れていなかった私は、アメリカに来てから既に何度も転げ落ちていた。（『若き数学者』）

したがって、本稿では、異なるレベルと考えられる主節と文脈をあえて同じレベルのものとして扱う。

本稿では、連体節を含む文において被修飾名詞焦点、連体節焦点、名詞句焦点の三つがあるということを主張するとともに、このことと限定的・非限定的連体節との関係を考察する。

2. 先行研究

連体節に関する先行研究の一つに、被修飾名詞と連体節との格関係に注目した寺村（1975～78）³⁾がある。寺村は、連体節を「内の関係」と「外の関係」の二つに分けている。次の(5)は「内の関係」の例であり、(6)は「外の関係」の例である。

- (5) 秋刀魚を焼く男
 (6) 秋刀魚を焼く匂い

(5)は、「男が秋刀魚を焼く」のように文の形に変形することが可能である。こうした場合、連体節の述語「焼く」と被修飾名詞「男」との間には「ガ格の関係」があると言われる。他方、(6)では、連体節の述語「焼く」と被修飾名詞「匂い」との間には、いかなる格関係も成り立たない。このような「内の関係」、「外の関係」といった観点での連体節の分類は、名詞句を文から切り取って、連体節と被修飾名詞との関係から考察したものであると言えよう。

また、連体節に関しては、限定的なものと非限定的なものがあるとの指摘(三宅(1993)、益岡(1995)など)も見られる。限定的修飾は次の(7)のように被修飾名詞に対して何らかの限定を加えるものであるのに対して、非限定的修飾は、連体節が被修飾名詞に関する何らかの情報を単に付加するだけのものである。

- (7) 松本清張が書いた小説はとても面白い。(三宅1993)
 (8) 「点と線」という小説がある。松本清張が書いたこの小説はとても面白い。(三宅1993)

このような限定的、非限定的という区別は、その分析に意味論の観点を取り入れており、被修飾名詞の意味を限定するかどうかという観点からなされている。益岡(1995)は非限定的連体節には意味的には主節を修飾するものがあるとしている。

3. 連体節表現の焦点の種類

連体節表現において、連体節は従属節であり、基本的にそれ以外の部分が最も重要な要素であると思われる。その主要部がより必要とする部分が何であるかという観点から連体節を考察すると、連体節を含む文の焦点には被修飾名詞焦点、連体節焦点、名詞句焦点の3種類があると考えられる。本節ではそれぞれがどのようなものであるかを概観することにする。

3.1 被修飾名詞焦点

被修飾名詞焦点とは、一つの構文において被修飾名詞が文の主要部にとって最も重要な部分であるような場合である。次の(9)と(10)がその例である。

- (9) 僕は途中でコーヒーハウスに入って、一服し、ブランデーの入った熱く

て濃いコーヒーを飲んだ。(『ダンス』)

- (10) 福岡市中央区で4日夜、通行中の女性が後ろから来た男にかばんをひったくられる事件が4件相次いだ。中央署が窃盗容疑で調べている。調べによると、同日午後6時20分ごろ、中央区春吉2丁目の路上で、女性会社員(25)が後ろから来た自転車に乗った男に現金約2万円が入ったかばんを奪われた。……(『朝日新聞』朝刊2007/12/5)

(9)の「ブランデーの入った熱くて濃いコーヒーを飲んだ」において、述語の「飲んだ」にとって不可欠な部分は、被修飾名詞である「コーヒー」であり、「ブランデーの入った熱くて濃い」ではない。もちろん「コーヒー」が連体節によって修飾されることにより、その種類が明確化されるという効果はある。(10)についても同様のことが言える。「奪われた」のは「かばん」であり、「現金2万円が入った」に修飾されることにより「かばん」の中身が明らかになる。つまり、被修飾名詞焦点の場合には、主節あるいは文脈にとって被修飾名詞がより重要な要素であり、連体節は表現を豊かにする機能を持つと考えられる。

3.2 連体節焦点

連体節焦点とは、文の主要部にとって連体節の焦点度が高い場合のことである。つまり、構造的に被修飾名詞を修飾している連体節が主節の「原因」を表すなど、連体節があったほうが主節の意味がもっと理解しやすくなるようなものである。次の(11)と(12)がその例である。

- (11) ベッドに慣れていなかった私は、アメリカに来てから既に何度も転げ落ちていた。(=4)
- (12) 魚や肉を切った包丁で野菜などを切ると匂いが付く。(作例)

(11)は非限定的連体節の例である。連体節である「ベッドに慣れていなかった」は被修飾名詞である「私」に関する情報を付け加えているように思われるが、意味的には主節である「何度も転げ落ちた」の理由の説明である。そのため、主要部である「何度も転げ落ちた」がもっとまとまった意味を伝達するためには、その理由である連体節「ベッドに慣れていなかった」を必要とする。

(12)の場合は、連体節の「魚や肉を切る」ことを「野菜を切る」ことの前に行うと、「匂いが付く」という関係である。つまり、連体節と主節は、時間的に前後して起きる出来事である。「野菜などを切ると匂いが付く」にとってより重要であるのは「野菜を切る」前に行く「魚や肉を切る」という行為である。

このような連体節焦点の一つの特徴は、被修飾名詞が省略されたり、連体節と主節の関係を表す接続助詞、形式名詞などを入れても自然な文になるということである。(11)と(12)を言い換えると、次のようになる。

- (13) 私はベッドに慣れていなかったので、アメリカに来てから既に何度も転げ落ちていた。
 (14) 包丁で魚や肉を切って、野菜などを切ると匂いが付く。

3. 3 名詞句焦点

名詞句焦点とは、文の主要部にとって連体節と被修飾名詞とが同じ程度に重要であるような場合である。次の(15)と(16)がそれにあたる。

- (15) たすきをかけた第1走者35人が父母やチームメートらが応援する前を駆け抜けていった。(『朝日新聞』朝刊2007/1/29)
 (16) 都知事選まで2カ月を切った。石原氏が「赤旗」に白旗を揚げる日は来るのだろうか。(『朝日新聞』週刊2007/2/23)

(15)の被修飾名詞「前」は単独では完全な意味を表すことができない。同様に、連体節の「父母やチームメートらが応援する」だけでも完全な意味、つまり「駆け抜ける」が必要とする「場所」を表すことができない。(15)では、被修飾名詞である「前」とそれを修飾する「父母やチームメートらが応援する」が組み合わさって一つの場所を表すことになる。つまり、名詞句焦点の構文では、連体節と被修飾名詞がセットとなっており、いずれも欠くことのできない部分である。(16)に関しては、連体節と被修飾名詞がセットになって一つの時間を表している。

4. 構文的・意味的特徴

第3節では連体節を含む文の焦点を三つに分類することができると述べたが、本節ではそれぞれの特徴について考察を行う。

4. 1 被修飾名詞焦点の場合

4. 1. 1 被修飾名詞が主節の補語である場合

次の(17)では、被修飾名詞である「コーヒー」(あるいは名詞句)が、主節の述

語である「飲んだ」と「ヲ格」の関係で結ばれている。つまり、「コーヒー」（あるいは名詞句）は「飲んだ」の補語（述語の意味を補う文の要素）である。

- (17) 僕は途中でコーヒーハウスに入って、一服し、ブランデーのに入った熱くて濃いコーヒーを飲んだ。(=9)

述語文において、文の中心である述語は一つ、あるいはそれ以上の補語を必要とし、補語は格助詞によって述語と結ばれる。補語には必須補語、準必須補語である。そのうち、必須補語はその述語にとって不可欠のものである。(17)の主節の述語である「飲んだ」にとって、「何を」という対象は必須補語である。したがって、(17)において、述語の「飲んだ」にとって不可欠なのは「コーヒー」である。そこで、それを修飾している「ブランデーのに入った熱くて濃い」は副的なものとなり、被修飾名詞に焦点が置かれると考えられる。前掲の(10)に関しても同様のことが言える。

(17)のような文脈では被修飾名詞焦点になるが、次の(18)のような疑問文において「どんなコーヒー」であるかに対して「ブランデーのに入った熱くて濃いコーヒー」と答えた場合には、連体節に焦点が置かれると思われる。

- (18) A：どんなコーヒーを飲んだ？
B：ブランデーのに入った熱くて濃いコーヒーを飲んだの。

前掲の(10)を再掲した、次の(19)においても同様のことが言える。

- (19) 福岡市中央区で4日夜、通行中の女性が後ろから来た男にかばんをひたたくられる事件が4件相次いだ。中央署が窃盗容疑で調べている。調べによると、同日午後6時20分ごろ、中央区春吉2丁目の路上で、女性会社員(25)が後ろから来た自転車に乗った男に現金約2万円が入ったかばんを奪われた。……

(19)の文脈からこの記事は「ひたたくり事件が相次いだ」ということを伝えようとしていることが分かる。そのため、「何を」に対する「かばん」がより重要である。しかし、これが被害額などに関する文脈に変わると、連体節と被修飾名詞の重要度も変わってくると思われる。また、「現金約2万円も入った」のように取り立て助詞「も」などが使われると、焦点が移動する可能性もある。

4. 1. 2 連体節が被修飾名詞に対する情報付加である場合

連体節と被修飾名詞の意味関係の一つに情報付加がある。次の⑳がそれにあたる。

- ⑳ 先日、お笑い芸人の陣内友則さんと結婚した人気女優の藤原紀香さんです。(作例)

⑳では、連体節である「先日お笑い芸人の陣内友則さんと結婚した」は、被修飾名詞である「藤原紀香」に対する背景の情報である。この文において「人気女優の藤原紀香さんです。」のみで十分であり、連体節の「先日お笑い芸人の陣内友則さんと結婚した」は「藤原紀香さんの近況はどうか」という説明にすぎない。そのため、被修飾名詞のほうに焦点が置かれていると考えられる。ただし、「先日お笑い芸人の陣内友則さんと結婚した」によって、「藤原紀香さん」が最近結婚したという情報が得られると言えよう。

4. 1. 3 被修飾名詞のみでその内容が想像できる場合

次の㉑では、連体節「すぐに自宅に帰れない」は被修飾名詞「帰宅困難者」の説明にあたる。

- ㉑ 今回の（地震時の避難所に関する）調査対象は住民で、都内で約390万人に上るとされる帰宅困難者は含まれていない。すぐに自宅に帰れない帰宅困難者は、公園などで一時避難した後、会社や自宅に帰ることになる。（『朝日新聞』朝刊／2007／5／24）

このような場合には、前の説明がなくても予備知識あるいは文脈から「帰宅困難者」が何を意味しているのかを把握することができる。そのため、㉑の場合、文脈にとって、より重要な部分は被修飾名詞であり、連体節というよりも被修飾名詞の焦点度が高いということになる。

4. 2 連体節焦点の場合

連体節焦点の構文において、意味的には連体節がもっとも必要とされ、被修飾名詞を取り除いても、あるいは被修飾名詞の代わりに接続助詞、形式名詞などを入れても成り立つ。以下、一体どのような構文が連体節焦点になりやすいかを考察する。

4. 2. 1 名詞述語文の場合

次の②と③は、名詞句が名詞述語の位置に現れている文である。

- ② 夏目さんは他人に頼まれたことを好く快諾する人だったと思う。(内田魯庵『温情の裕かな夏目さん』、青空文庫)
- ③ この本はわれわれに新理想を与え、新希望を与えてくれる本であります。(内村鑑三『後世への最大遺物』、青空文庫)

②では、「夏目さん」が主題で、題述部⁴⁾は連体節を含んだ「他人に頼まれたことを好く快諾する人だった」である。主題があるとそれに対する説明文が必要となるが、②、③のような構文では、連体節がちょうど主題に対する説明、つまり題述となっている。そのため、題述部のほうがより必要とされる部分となるわけである。当然のことながら、②と次の④の間にはニュアンスの違いが存在する。

- ④ 夏目さんは他人に頼まれたことを好く快諾する。

両者を比べてみると、②のような連体節を含む文は、「彼」がどんな人であるかといった彼の性質が述べられている。それに対して、④のような文はただの記述文で、「夏目さんが何をどうするか」ということを記述的に述べているのみである。

4. 2. 2 連体節が主節の事態に対する情報付加である場合

4. 1. 2では被修節名詞に対する情報付加であるような文を考察したが、連体節の中には主節に対する情報付加を表すものもある。次の⑤と⑥がそれである。

- ⑤ 化粧をしていない幸子は応対に出られなくて困った。(三宅1993)
- ⑥ 多少の自信を腕に持っている私も、彼女のこうした外交手腕に対しては大いに謙遜の必要を認めさせられていた次第であった。(夢野久作『何でも無い』、青空文庫)

益岡(1995:140)は、主節に対する情報付加にはいろいろな内容のものがあるが、主なものとしては「対比・逆接」、「継起」、「原因・理由」、「付帯状況」の関係を挙げることができるとしている。⑤は「原因・理由」、⑥は「逆接」の

関係である。㉕は、「幸子は応対に出られなくて困った」でも文としては成り立つ。しかし、どのような理由で応対に出られないかという疑問が残る。連体節である「化粧をしていない」は、まさに「応対に出られない」の理由を表して、この文の主要部である「応対に出られなくて困った」にとってより重要な部分は被修飾名詞ではなく、連体節であると思われる。

4. 2. 3 副詞節

副詞節において、一般的には主節がその文の主要部となる。本節では連体節が副詞節の一部となっている場合を考察する。

次の㉗と㉘は、名詞句が因果関係を表す複文の理由節の部分にあたるような文である。

- ㉗ 宗助はまた自分のいまだかつて耳にした事のない話だけに、一々少なからぬ興味を有（も）ってそれを聞いて行った。（夏目漱石『門』、青空文庫）
- ㉘ この人たちは、まあ、とにかく継続するに決まっている人だから、数に入らないんだけど。（名大会話）

上例において、文の主要部は「それを聞いて行った」と「数に入らない」という、理由節に対する主節である。名詞句は従属節である理由節に位置し、連体節は統語論的には被修飾名詞を修飾しているが、意味的には主要部である主節と関係を持つ。つまり、㉗では、「それを聞いて行った」理由は、「自分のいまだかつて耳にした事のない」である。㉘も同様に、「数に入らない」理由は、「継続するに決まっている」である。つまり、このような文において連体節は「それを聞いて行った」、「数に入らない」といった主節と意味的につながっている。したがって、主節にとって、被修飾名詞よりも連体節が重要である。

また、次の㉙は、連体節が逆接を表す複文の逆接節に置かれている文である。

- ㉙ あの家出の日に、あれほど自分を淋しくさせた男なのに、それでも自分は拒否できず、幽かに笑って迎えるのでした。（太宰治『人間失格』、青空文庫）

㉙のように、名詞句が逆接節に位置するときにも、連体節は統語論的には被修飾名詞を修飾しているが、意味的に被修飾名詞ではなく文全体における主節と関連を持つ。㉙では、「あれほど自分を淋しくさせたのに、自分は拒否できな

い」ということを言おうとしており、連体節は主節と意味のつながりを持っている。

4. 3 名詞句焦点の場合

被修飾名詞のみでは完全な意味を表すことが難しい場合、あるいは文脈が被修飾名詞と連体節を必要とする場合には、名詞句に焦点が置かれやすいと思われる。次に名詞句焦点の構文の特徴について考察する。

4. 3. 1 被修飾名詞が相対名詞である場合

次の③④は、被修飾名詞が相対名詞の場合である。

- ③ たすきをかけた第1走者35人が父母やチームメートらが応援する前を駆け抜けていった。(=16)
- ④ 都知事選まで2カ月を切った。石原氏が「赤旗」に白旗を揚げる日は来るのだろうか。(=17)

相対名詞とは、基準が定まらなると指示対象が定まらないような名詞のことである。性質上、このような相対名詞は独自で完全な意味を表すことが難しい。③の場合、「駆け抜ける」という主節の述語は場所を表す「前」を必要とするが、「前」は独自では完全な意味を表せず、その修飾語である「父母やチームメートが応援する」という基準を表す部分を必要とする。同様に、連体節である「父母やチームメートが応援する」も単独では主節の述語が必要とする場所を表すことができなく、「前」に頼ることになる。つまり、この場合は文の主要部が被修飾名詞を、被修飾名詞が連体節を必要とすると考えられる。このような場合、連体節と被修飾名詞がともに重要であるのは、「前」という名詞の性質とも関係があるが、主節の影響も受けると言えよう。④に関しても同様のことが言える。

4. 3. 2 内容節の場合

次の⑤における連体節は一般的にいう内容節である。

- ⑤ 2点差で勝てば自力で決勝トーナメント進出を決められるという条件で臨んだ一戦は、度重なるシュートミスで番狂わせの予感さえ漂っていた。(『朝日新聞』夕刊2006/6/24)

㉓の場合、主節の述語「臨んだ」にとって、連体節と被修飾名詞のいずれも不可欠なものであると思われる。「条件」のみでも、その内容である連体節のみでも㉔や㉕のように構造的にも意味的にも不完全な文になる。したがって、㉓は名詞句焦点の例であると考えられる。

- ㉔? 条件で臨んだ一戦は、度重なるシュートミスで番狂わせの予感さえ漂っていた。
- ㉕? 2点差で勝てば自力で決勝トーナメント進出を決められるというので臨んだ一戦は、度重なるシュートミスで番狂わせの予感さえ漂っていた。

㉓において、連体節が内容節であるため、内容を表す連体節も概念を表す被修飾名詞も同じ程度に重要であると考えられる。しかし、内容節であれば、すべて同じであるかというところでもない。次の㉖も㉓と同様で、被修飾名詞が「条件」である。

- ㉖ 北朝鮮が6者協議への復帰やミサイル発射凍結など、日米両政府が中国に託した条件に応じた場合、制裁を外した非難決議で対応する可能性に含みを残したものだ。(『朝日新聞』夕刊2006/7/11)

㉖と㉓は文脈が異なる。㉓は「何かの条件で試合に臨む」ということである。この場合、「条件」という名詞のみでは不足であり、「どのような条件であるか」という、「臨む」際の前提を必要とする。それに対して㉖の主節の述語である「応じる」にとっては、出された条件に応じるか応じないかが問題であって、その内容が最も重要であるとは考えられない。したがって、㉖は、被修飾名詞焦点であると考えられる。このように、同じ内容節で、同じ被修飾名詞が使われても主節あるいは文脈が変われば、連体節・被修飾名詞の重要度も変わり、その焦点度も変わると言えよう。

4. 3. 3 文脈が両方を必要とする場合

連体節を含む文の中には、次の㉗のように談話の途中で情報を付加する文もある。

- ㉗ 私、東京から来ました中川亜矢子と申します。実は婚約していた大西明彦さんがここへ取材に来ていて、行方不明になったんです。(益岡1995)

㉔は非限定的連体節で、「大西明彦さん」のみで十分であるようにも思われるが、実際には、連体節の「婚約していた」が省かれると、「大西明彦さん」とは誰だろうかという疑問が生じる。それは「大西明彦さん」が初めて登場する人物で、名前のみでは唐突な印象を与えるからである。連体節を用いることによって、「大西明彦さん」がどのような人物であるかの説明がなされ、唐突感が解消されるのである。そのため、この文脈において連体節と被修飾名詞の両方が重要となるのである。したがって、この文は名詞句焦点にあたると思われる。益岡（1995）は、このような連体節はコミュニケーションを円滑にするために必要であるとしている。

5.3 種類の焦点の関係

連体節、被修飾名詞のいずれの焦点度が高いかを判断するとき、はっきりとした基準があれば判断しやすいと思われる。その一つとして考えられるのが省略可能であるか否かである。前掲の(1)～(3)などのようにそれがうまく当てはまる場合もある。しかし、省略可能であるか否かの基準を決めるのは難しい。つまり、構造的に可能な場合でも意味的には不可能な場合もある。また、焦点度が低いものが必ずしも省略可能であるとは限らない。そのため、連体節と被修飾名詞のいずれが文の主要部と意味的により強くつながっているかということが重要になると思われる。しかし、この問題は疑問文のように疑問詞の部分が焦点であるといったはっきりしたものと異なり、はっきりとした境界線を決めるのは難しい。その境界線は連続的なものと思われる。次の㉕において、連体節は被修飾名詞に対する情報付加である。三宅（1995）は、このような連体節はそれを省略しても成り立つとしている。

- ㉕) 黒柳徹子の書いた『窓ぎわのトットちゃん』は今でも老若男女に愛読されている。(作例)

しかし、この文において連体節である「黒柳の書いた」を省略されると少し唐突な感じを与える。ただ、この場合、その唐突さは㉔ほどではない。つまり、同じく名詞句焦点と思われる文の中にもその程度の差が見られるのである。

また、前述のように同じ連体節が使われても文脈の変化あるいは主節が変わることにより、その焦点度は連体節から被修飾名詞にあるいは名詞句全体に移動する場合もある。当然ながらその逆も存在する。

したがって、3種類の焦点が存在すると考えられるが、それらは連続的なものであり、基準を決めてそれをはっきりと区別するのは難しいと言えよう。

6. 連体節表現の焦点と限定・非限定

限定的・非限定的という考察も意味論的な要素を取り入れたものである。本節では本稿で主張する焦点と限定的・非限定的という分析との関係を考察する。

限定的連体節は、被修飾名詞に何らかの限定を加えるものであり、限定的連体節では、連体節が焦点になるように思われる。一方、非限定的連体節は被修飾名詞に関する、何らかの情報を付加するものであり、非限定的連体節では、連体節が副次的なものであるように思われる。しかし、このような対応関係は絶対的なものではない。

次の(38)と(39)は限定的連体節であると思われる。

- (38) どの映画を見ようかと家族で相談した結果、今回は息子が好きな映画を見ることにした。(金水1986)
- (39) 僕は途中でコーヒーハウスに入って、一服し、ブランデーの入った熱くて濃いコーヒーを飲んだ。(=9)

(38)では映画を見るということが決まっていて、どのような映画を見るかが重要であるので、(38)は連体節焦点の構文である。しかし、(39)では、何を飲んだのかが分かれば十分であり、どのような「コーヒー」であるかはそれほど重要ではないので、被修飾名詞焦点である。このように同じ限定的連体節であっても連体節焦点の場合もあるし、被修飾名詞焦点の場合もある。

それでは、非限定的連体節である次の(40)と(41)の焦点はどうなるだろうか。

- (40) 日曜日に何をしようかと家族で相談した結果、今回は息子が好きな映画を見ることにした。(金水1986)
- (41) 化粧をしていない幸子は応対に出られなくて困った。(=25)

(40)では、何をするかが問題であって、「映画」だけで十分なはずである。つまり、どんな映画を見るかは最も重要な事柄ではない。したがって、「何を」に対する答えである被修飾名詞の「映画」に焦点があたるため、(40)は被修飾名詞焦点の例である。(40)が非限定的連体節であるにもかかわらず、その焦点が連体節

ではなく被修飾名詞に置かれるのは、従来の「被修飾名詞に対する情報付加」という説明のほかに、(40)の文脈において一番必要とされるのは被修飾名詞であるからであるという説明が必要である。

一方、(41)では、「化粧をしていない」は「幸子」を限定していないが、「化粧をしていない」は、主節である「応対に出られなく困った」の原因である。つまり、連体節は意味的には主節と関係を持つ。このように、非限定的連体節の場合にも限定的連体節の場合と同様に、焦点は文によって異なる。

(38)と(40)は、名詞句のみを取り出すと、いずれも「息子が好きな映画」である。また、全体の文の主節である「今回は息子が好きな映画を見ることにした」も同じである。異なるのは条件節の部分である。(38)と(40)はその条件節の違いにより、最も必要とする部分が異なり、それぞれの焦点が異なってくる。

金水(1986:608)は、「一般に、限定的連体には焦点が置かれ易く、情報付加連体には焦点が置けない」⁵⁾と述べている。しかし、限定的連体節と思われる(39)は連体節ではなく被修飾名詞に焦点が、非限定的連体節と思われる(41)は連体節に焦点が置かれている。本節の考察から、連体節を含む文の焦点は、連体節の種類とある程度関係があるが、それぞれが使われた文の意味、構造によっても異なると言えよう。

7. まとめ

本稿では、連体節・被修飾名詞をそれが使われた文の主要部との関係で考察することにより、連体節と被修飾名詞の重要度には差があり、焦点が連体節に置かれる連体節焦点、焦点が被修飾名詞に置かれる被修飾名詞焦点、また焦点が連体節と被修飾名詞の両方に置かれる名詞句焦点があると主張した。また、それぞれの特徴を考察し、限定的・非限定的という分類と本稿で指摘した焦点の種類との対応関係は「ゆるやかである」ということを述べた。ただし、それらを判断するはっきりとした基準を決めるのは難しく、同じ文でも文脈が変わるとその焦点が変わる可能性がある。また、この問題は、すべての連体節表現をさらに厳密に分類するという課題と連動させて、さらに考察する必要がある。

注

- 1) 寺村 (1975~78)、奥津 (1974)、高橋 (1979) などがある。
- 2) 益岡 (1995) など、連体節構造のみでなく、連体節を含む構文を考察している先行研究もある。
- 3) 寺村に似た研究に奥津 (1974) がある。奥津は、「同一名詞連体修飾」と「付加名詞連体修飾」に分けているが、これは寺村の「内の関係」・「外の関係」と基本的には同じである。ただ、寺村は記述的な研究の立場から、奥津は生成文法の標準理論の立場から連体修飾節を扱っている点に相違がある。
- 4) 題述という用語は高見 (1995) を参考にしてしている。
- 5) 金水 (1986) の「焦点」と本稿の「焦点」は「重要である」という点では一致していると思われる。

参考文献

- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論—名詞句の構造—』大修館書店
 カレル・フィアラ (2000) 『日本語の情報構造と統語構造』ひつじ書房
 金水 敏 (1986) 「連体修飾成分の機能」『松村明教授古希記念 国語研究論集』
 明治出版
 柴谷方良他 (1982) 『言語の構造—理論と分析—意味・統語篇』くろしお出版
 高橋太郎 (1994) 『動詞の研究』むぎ書房
 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較—受身文、後置文の分析—』く
 ろしお出版
 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 —日本語文法編—』くろしお出版
 益岡隆志 (1995) 「連体節の表現と主名詞の主題性」『日本語の主題と取り立て』
 くろしお出版
 三宅知宏 (1993) 「日本語の連体修飾について」『高度な日本語記述文法書作成
 のための基礎的研究』平成4年度科学研究費研究成果報告書
 吉本啓 (1993) 「日本語の文階層構造と主題・焦点・時制」『言語研究』103

例文出典

(『朝日新聞』) 朝日新聞オンライン記事データベース「聞蔵(きくぞう) II for

Libraries]

(『ダンス』)『ダンス・ダンス・ダンス』村上春樹、講談社文庫
(『若き数学者』)『若き数学者のアメリカ』藤原正彦、新潮文庫
(青空文庫) インターネットの電子図書館 <http://www.aozora.gr.jp/>
(名大会話) 名大会話コーパス